

アクセシビリティをテーマに雑誌制作をおこなって

新井 駿弥[†] 宮崎 由唯[†] 亀崎 勇人[†] 山口 由結[†]
井山 十萌[†] 大嶋 優希[†] 小室 亜季[†] 竹下 瑞記[†] 植村 八潮[‡]

^{†‡}専修大学文学部ジャーナリズム学科 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1

[‡]専修大学文学部ジャーナリズム学科 植村ゼミナール3年

E-mail : [‡]yashio@isc.senshu-u.ac.jp

あらまし 専修大学文学部ジャーナリズム学科植村ゼミナール3年生は、「アクセシビリティ」をテーマに雑誌制作をおこなった。制作した雑誌『re@lize』では、アクセシビリティを知らない大学生に興味深く読んでもらうことを目的とした。特集テーマに、「全盲のキャラクターデザイナーが拓く未来」、「知れば知るほど面白い！音訳の世界」、「海と人、社会との架け橋となる」を据え、コラム記事に「映像技術が持つ可能性」、「車椅子と共存する」、「日常の中の想像力」と日本と専修大学のアクセシビリティを年表形式で紹介したページを用意し、内容の充実を図った。アクセシビリティに関して知らない状態から雑誌を制作することとなったが、自分たちがアクセシビリティについてしっかりと学ぶことで、現代社会に本当に必要なことは何かについて理解し、伝えることができた。

キーワード 専修大学、アクセシビリティ、『re@lize』

Creating a magazine on the theme of accessibility

Shunya ARAI Yui MIYAZAKI Hayato KAMEZAKI Yui YAMAGUCHI
Tomoe IYAMA Yuki OSHIMA Aki KOMURO Mizuki TAKESHITA Yashio UEMURA
Department of Journalism, Faculty of Letters, Senshu University
2-1-1 Higashimita, Tama-ku, Kawasaki-shi, Kanagawa 214-8580, Japan

E-mail : [‡]yashio@isc.senshu-u.ac.jp

Abstract We, the third-year students of the Uemura Seminar in the Department of Journalism, Faculty of Letters, Senshu University, produced a magazine on the theme of “accessibility”. The magazine we produced, “re@lize,” was intended to be an interesting read for college students who are unfamiliar with accessibility. The feature themes are “The Future Opened Up by a Blind Character Designer,” “The more you know, the more interesting it is! The World of Transliteration,” and “Building bridges between the sea, people, and society.” So column articles “The Potential of Imaging Technology,” “Coexisting with Wheelchairs,” and “Imagination in Everyday Life” and a chronological page on accessibility in Japan and at Senshu University were included to enhance the content. Although we had to produce the magazine without knowing anything about accessibility, by learning about accessibility ourselves, we were able to understand and communicate what is truly necessary in today's society.

Keyword Senshu University, accessibility, re@lize

1. 雑誌制作目的と背景

本雑誌は、日本国内におけるアクセシビリティについて学生の目線から今現在、どのようなアクセシビリティがあるのかを取材し、雑誌の記事に書き起こすことでアクセシビリティについて全く知識がない人や興味はあるが情報をどこで入手すればよいか困っている人に向けて、「知るきっかけ」を提供することを目的として制作した。

アクセシビリティに関する話題は、2023年に筋疾患先天性ミオパチーという重い障害を持つ作家の市川沙央さんが『ハンチバック』で第169回芥川賞、第128回文学界新人賞を受賞し、彼女が芥川賞の受賞会見でバリアフリーについて言及したのをきっかけに注目が高まった。そこで改めてアクセシビリティについて調べ、記事を執筆する中で私たち自身もアクセシビリティとは何なのかを考えつつ、読者にもアクセシビリティを知ってもらおうと雑誌の制作を開始した。

2. 事前準備

今回、アクセシビリティをテーマとした雑誌を作るにあたり、私たちは去年ゼミ活動で訪問した新聞博物館でのお話を振り返った。性別や障害による差別に焦点を当てた企画展「多様性 メディアが変えたもの メディアを変えたもの」を鑑賞し、性や障害の多様性について深く考えさせられた。これを機に自分たちの身近にあるアクセシビリティに注目し、雑誌制作に取り組んだ。

3. テーマの設定

アクセシビリティがテーマに決定してから、それぞれが企画を出すことから始めた。最初は1人10本企画、全員で80本を考え話し合いの中で発表しあった。それぞれ興味がある分野が違ったので、身体障害、心の障害どちらに焦点を当てるか、アクセシビリティを取り入れている施設の中でどこに取材するかなど、さまざまな案が出た。その中でさらに1人3本に絞り込み、希望取材先へのアプローチを始めた。ちなみに、雑誌で取り上げなかった企画としては「手話サークルへのインタビュー」、観光地ではどのような対策が行われているのか、生田緑地を例に挙げた「観光とアクセシビリティ」、スポーツ観戦におけるアクセシビリティがあった。

取材先を探る中で、元の企画から内容が変わったものもある。雑誌内20、21ページの車椅子利用者へのインタビュー記事は、元はバリアフリーの掛け合わせによって起きる障害についての調査、取材であった。しかし、取材する中で車椅子利用者への取材に企画内容が変わった。22ページから25ページの東京都障害者セーリング

連盟への取材も、元はスポーツを支える側への取材であった。しかし、調査を進めるうちに当事者への取材に変わった。

これらのように企画が変化したものもあったが、「障害を知ってもらおう」ということを第一に企画決めを行った。

4. 構成

本雑誌は、特集3本とコラム4本で構成されている。全盲というハンデを背負いながらもキャラクターデザイナーとして活躍している YUKAYUKA さんにインタビューを実施した「全盲のキャラクターデザイナーが拓く未来」、視覚に不自由さを抱いている人に音声で文字情報を届ける音訳について研究した「知れば知るほど面白い！音訳の世界」と、セーリングのパラスポーツ競技に挑む方々にインタビューを行った「海と人、社会との架け橋となる」の3本が特集である。また、映像アクセシビリティ、車椅子、ノートテイクと様々な視点からアクセシビリティに迫った「映像技術が持つ可能性」「車椅子と共存する」「日常の想像力」の4本をコラムとして掲載している。

また、表2、3では「知らないからこそ読んでほしい、アクセシビリティのこと」というコピーのもと雑誌制作に対する思いを記し、12ページと13ページでは日本のアクセシビリティの歴史と専修大学のアクセシビリティに関する取り組みをまとめた。

5. 制作方法

特集ページ1つ目の「全盲のキャラクターデザイナーが拓く未来」では、全盲のキャラクターデザイナーである YUKAYUKA さんにインタビューを実施した。

特集ページ2つ目の「知れば知るほど面白い！音訳の世界」は、音訳ボランティアの団体の代表にインタビューを行い、川崎市宮前区で行われた音訳体験会に参加し講習を受けた。

特集ページ3つ目の「海と人、社会との架け橋となる」では、東京都障害者セーリング連盟の方々にインタビューを実施。また、普段連盟の方が乗っているヨットにも乗船させていただいた。

コラム「映像技術が持つ可能性」ではNHK放送研究所にインタビューを行い、「車椅子と共存する」では文献調査に加えて実際に車いすユーザーにインタビューを実施した。また、「日常の想像力」では、本学でノートテイクについて授業を行っている神山みや子氏にインタビューを実施した。

日本のアクセシビリティの歴史については文献調査を中心に研究。専修大学のアクセシビリティの取り組みについては大学の障がい学生支援室に聞き取り調査を行った。

6. 特集①『全盲のキャラクターデザイナーが拓く未来』

雑誌テーマが「アクセシビリティ」に決まってから、アイデア出しをしていった際に生まれた「目が見えない人々は、どうやって文字や絵を書いているのだろうか？」という単純な疑問から派生した企画。大阪府在住のキャラクターデザイナー・YUKAYUKA さんに写真提供と取材の協力をしていただき、ビジュアルが華やかな誌面に仕上がった。

YUKAYUKA さんは全盲のキャラクターデザイナーだが、だからといって悲観的な文章や、キャラクターデザイナーではなく全盲の人としての YUKAYUKA さんを描いた記事にはしたくないという想いがあったため、キャラクターデザイナーとしての活躍や今後の展望を中心にした文面にすることを心がけた。

7. 特集②『知れば知るほど面白い！ 音訳の世界』

アクセシビリティについて考えるにあたり、さまざまな要因で目が不自由になってしまった人の情報獲得の手段として、どのようなものがあるのかを考えた。執筆担当者は図書館のアクセシビリティについて学んでおり、講義の中で「マルチメディア DAISY」が取り上げられたことで、墨字情報を音声にして届ける活動である「音訳」について、取材を行った。

音訳についてなじみがない読者がほとんどではないかと考え、音訳の概要と歴史をわかりやすく掲載することを目指した。そして、ボランティアベースで行われる音訳の現在と未来について、その世界で活躍する方々のインタビューを行うことで、読者に「音訳」を立体的に知ってもらえるような記事作りを行った。

全国音訳ボランティアネットワークの代表、藤田昌子さんからは、音訳ボランティアの現状と、ボランティアとして無償で活動することの限界を伺うことができた。今後、ボランティア活動をより活発化させていくために必要なことは何か、について、非常に考えさせられるインタビューとなった。また、実際に音訳ボランティアとして活動する皆さんからは、古い体制から脱するために、コロナ禍を経てボランティア団体として取り組んでいることなどを中心にお話を聞くことができた。

8. 特集③『海と人、社会との架け橋となる』

「アクセシビリティ」を考えたときに、想定していた読者層である大学生に近い題材を特集したいと思い、スポーツにしようと思った。スポーツの中でも、執筆者が親しんでいるヨット競技について「健全者でも大変なヨットを障害者は一体どうやって乗っているのか」と疑問に思ったため生まれた企画である。

東京都障害者セーリング連盟の國松慎太郎さんをはじめとするメンバーの方々が、ヨットと出会いどう人生が変わっていったか、今を楽しんでいるのかを伝えることに力を入れた。その中でヨットにどのような近づきやすさがあったのか、ヨット競技の魅力に迫る特集である。

今回の記事を通して、障害者セーリング競技やボランティアの支援に少しでも興味を持ってもらい、それをセーリング界の普及につなげることができれば幸いである。

9. コラム記事

コラム記事 4 本は特集記事以外のアクセシビリティに関する技術や取り組みについて、をコラム記事として取り上げ、雑誌内容の充実を図ったものである。

私たちの生活にも当たり前存在する映像技術のアクセシビリティについてNHK放送技術研究所の取り組みをまとめた「映像技術が持つ可能性」では、手話 CG 技術や解説音声など、進化を続ける映像のアクセシビリティについて職員のかける思いなどから、取り組みについて読者に興味を持ってもらうことを目的とした。

日本のアクセシビリティに関する法律を年表形式で紹介する「日本 アクセシビリティの歴史」と、専修大学の主な取り組みについてまとめた「専修大学のアクセシビリティ」では、日本の法律がどのように変化してきたのか、大学では障害のある学生に向けて具体的にどのような支援を行っているのかを読者に知ってもらいたい意図がある。

多くの人に知られている車椅子を実際に使用している人にインタビューを行った「車椅子と共存する一車椅子の歴史とともに」では、実際に車椅子を日頃利用している方へのインタビューだけでなく、車椅子の歴史もあわせて取り上げることで車椅子への理解をより深めてもらうことを目的とした。

また、「日常の中の想像力—ノートテイク知ってますか?—」では、専修大学で実際に「ノートテイク」を講義科目として教えている神山みや子先生にインタビューを行い、一般の人にはあまり馴染みのないノートテイクを読者に理解してもらいやすくするために、読み上げ原稿と実際のノートの画像を掲載し視覚的にもわかりやすい記事を目指した。

10. 学びと結び

雑誌制作という経験したことのない未知のことが、我々植村ゼミ 12 期生のみで本当に達成できるのかということ考えたときのことを今でも鮮明に覚えている。

実際に雑誌制作が始まり、私たちはテーマに選んだ「アクセシビリティ」についてほぼ何も知らない状態からのスタートとなってしまったので企画立案から苦戦するという厳しい始まりとなった。しかし、最終的にこのような形で雑誌の完成を発表することができて、安堵を感じている。

アクセシビリティをテーマにするまで、どういったものが該当するのか、さえ私たちは知らなかった。私たち以外にも、アクセシビリティについてよく知らない、という若者は多いのではないだろうか。現状、ボランティアベースで行われているアクセシビリティは高齢化などが続いており、その技術を継承する若者が少なくなっていることが問題視されている。また、当事者がどのような点に困っているのか、支える側がどのような点に注目すべきなのか、実際の声を聞く機会も多くはない。しかし、このような現実があるからこそ、未来を担う私たち若い世代がもっと関心を持ってアクセシビリティに取り組む必要があることを学んだ。今回取材をはじめとした雑誌制作を行ったことで、私たちから同世代にしっかり伝える方法を模索し、形にできたのではないだろうか。

アクセシビリティという今まで深く考えたことのなかった分野に関する取材、そして、それを分かりやすく記事に起こすという作業は、雑誌制作をしたことのなかった私たちにとってかなりの挑戦であった。その挑戦を乗り越えたことで知らないことに対するアプローチの仕方やそれをアウトプットし、他人に伝えるという能力など新たに得ることのできた能力が多々あると感じる。この経験を植村ゼミ 12 期生一同これからの人生に活かさせていけたらと強く思う。

参考文献

- ・点字ブロックについて、社会福祉法人日本視覚障害者団体連合
- ・沖川悦三、「車いすの歴史の変遷と今後の展望」、『日本義肢装具学会誌』、Vol.27 No.1 2011
- ・技研だより 2020 年 10 月号技研開所 90 周年記念企画 研究の歴史 人にやさしい放送の研究、NHK 放送技術研究所
- ・TVAC 情報誌「ネットワーク」掲載原稿、全国音訳ボランティアネットワーク
<https://www.onyaku.net/archives/2495>
- ・点字の歴史—についてんキッズページ
<https://www.nittento.or.jp/about/kids/braillehistory.html>
- ・WHILL 「車椅子の歴史とソノサキ」
https://whill.inc/jp/column/05_history